

治水から知水へ

ここ十数年の間に、河川をめぐる行政と住民の意識や取り組みは、大きく変化してきた。

明治29年に洪水を防ぐ治水を主眼とした「河川法」が作られ、やがて昭和39年に戦後の経済成長に伴う大改正が行われて、河川管理の目的に「利水」が加わる。そして平成9年の改正では「環境」というキーワードが入ってきた。

今まで河川を語る時、洪水防御や治水対策などが主体だった。しかし、近年は地域社会での河川の役割や景観、自然生態系の観点からといったさまざまな側面が広く認識されるようになってきた。21世紀の川は、コミュニティーや日常の暮らしから「遠のいた川」から「身近な川」へとシフトしてきたのだ。

「気づく→意識が変わる→知識を得る→行動する」という図式が成り立つように、まずは「気づく」ことが出発点になる。川を近くで眺めるといろいろなものが見えてくる。鳥のさえずり、飛び跳ねる魚、そして散乱するゴミ…。

自分の行動が環境に与える影響を理解すれば、最終的にライフスタイルを見直すことにつながる。人間は環境によって形成されるが、逆に環境は人間がつくるもの。川が身近なものへと整備された今、今度はわたしたちが川に近づく番だ。地域固有の財産、公共の空間である川を、どうかすぐそばで見つめて欲しい。

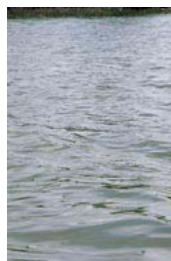
(特集：川と暮らす/おわり)

前 ページでA.R.T.の取り組みを発表した一人、名嶋優さんは、学習の中で福智山に登った感想を次のように話しました。「山頂は快晴で、英彦山から芦屋の河口までを見渡すことができました。身近な彦山川の流れが源流から海にそそぐまでを見ることができたんです。それまで「環境問題はグローバルな視点で」と教わってきた意味が、その風景を見て

環 分かった気がしました。環境問題には「シンク・グロ―バル、アクト・ローカル」、すなわち「地球規模で考え、身の回りから実践する」という考え方が求められています。赤池中の2年生は、まさにこのことを体験によって理解したことになります。さて、わたしたちの足元、彦山川、遠賀川を見てみると、その水質がまだ改善されていない

ことが目につきます。平成16年の九州一級河川水質ランキングでは遠賀川がワースト2位、彦山川がワースト9位。全国166の一級河川で見ると遠賀川の水質が154位、彦山川が127位です。汚濁原因のおよそ75%は家庭からの排水。これを改善するには浄化槽の設置も有効ですが、それ以前に、やはり各家庭が意識して行動

上 流で取水した水が水道水として流れていきます。その水は消毒され、さらに下流で水道水として利用されます。こうしたサイクルが海に流れ込むまでの間に何度も繰り返し返されているのです。蛇口をひねれば簡単に水が出ます。川にとっては、それも小さな源流です。



川を生かす

Hikosangawa

人は川に生かされている。川に近づき川を生き返らせることは、わたしたち自身を生かすことにつながる。



例 えば洗剤や石けんは環境に優しい負担の少ないものを選ぶとか、飲み残しをしないとか、油污は燃えるゴミとして出すとか：日ごろ少し気をつけるだけでも川の水はきれいになります。

地 球は水の惑星といわれていますが、わたしたちが利用できる淡水は、総水量の0.5%以下に過ぎません。地球上の水が風呂おけ一杯だとすると、わたしたちが使える水はわずかに一滴。この一滴を地上の生物が分かち合っているのです。わたしたちが今までのようにただ水を浪費するだけではいつかツケが回ってきます。家庭の水がやがて大海にそそがれるように、わたしたちの目が川に向けられることで、意識も行動もさらに広がります。わたしたちにはいま、一滴の心がけが必要です。



サラサラの源流か



傷ついた下流か

飲みたいのはどちらの水ですか？